

ニュービジネス最前線——日本の起業家たち

# 遺伝子検診で治療から予防へ 納得感ある医療サービスを提供

## クリニックMIRAI・インニューオータニ

### 今の医療に新風吹き込む試み

「三時間待ち三分診療」、  
「医療事故」、  
「モンスターパーシエント(患者)」、  
様々なミスマッチや不具合を抱える現代医療の最前線。

システム(ヒト(医師)、モノ(設備、技術)、カネ(医療費、病院経営))の制度疲労を改善していくには、素人目に見ても、すでに限界が見えており、議論の段階を超え、その厳しい現実を乗り越えるべく行動(変革)が必要であることは多言を要しない。

新境地を切り拓いていくことはできず、制度疲労はますます深刻になるばかりだ。今回、当コナーで紹介する取り組みは、新たな医療サービスの提供を通じ、納得感のある医療の実現を目指す試みとして注目を集



がん化モデル図 (提供: 柳メディファクト)

めている。  
「遺伝子検診」を手掛ける「クリニックMIRAI・インニューオータニ」。

病気の治療に軸足を置いていた従来型の医療よりも、予防を重視し、遺伝子検査によって病気のリスクを知り、健康を保持していくという取り組みだ。「遺伝子検査」というと何とも敷居が高い印象を受けるが、そんなことはない。一般の健康診断でもお馴染みの採血。だけで、約五週間で結果が出るという手軽なものだ。

同クリニックで実施しているのは「がん遺伝子検査」。体の十六部位(頭頸部、脳腫瘍、肺、甲状腺、肝臓、乳房、すい臓、白血球、大腸、胃、膀胱、腎臓、前立腺、卵巣、皮膚、子宮)のがん関連遺伝子を解析。がんの発症リスクを評価するもの。

のがん遺伝子の発現やがん抑制遺伝子の変異(傷がつく)が、契機となる。

遺伝子の変異は、多くの場合、後天的な要因(生活習慣の乱れや加齢など)によるものだが、この変異自体を、自己免疫で排除できなければ、腫瘍化(がん化)までには至らない。

だが、画像診断などで見つかる腫瘍(現在では、検査機器の進歩で最小で5mm程度のがんを診断できるといわれている)は、この遺伝子の変異から約五〜二十年をかけて、成長。したもので、こうなると、最小サイズの腫瘍でも、一般的ながん治療(手術、抗がん剤、放射線)の必要性が出てくると言われる。

早期発見、早期治療というスローガンが、がん治療では有名だ。が、同クリニックでは、早期治療よりもさらに前の段階、最新の画像診断技術でも検出できな

い微細ながん細胞の存在、あるいは前がん段階の「がんリスク」(遺伝子の変異)を、遺伝子検査で解析する「がん超早期リスク評価」を手掛ける。

一般的に「がん家系」として、がんになりやすい家系、いわゆる遺伝によるがんリスクが唱えられることがあるが「遺伝性の腫瘍」というのは、あらゆるがんの中で五〜一〇%程度。ゼロではありませんが、当クリニックが提供するものは、先天的ながんリスクよりもはるかに多い後天的ながんリスクを検査で示す「同クリニック・武井佳子院長。「人間ドックなどの画像診断で腫瘍がなくても、次の年には腫瘍が認められた」という話は割りと耳にしますよね。画像診断では、一定程度の大きさに腫瘍が成長していなければ、視認できませんが、画像診断で



クリニックMIRAI・武井院長

腫瘍の存在が分かるというレベルは、すでに一人前のがんが体中にあるという事。当クリニックの遺伝子検診では、まだがんになるか、ならないかというレベルでのリスクの可能性を示唆します」(武井氏)

がんという病を、予防できる疾病として明確に位置づけ、患者もしくは患者予備軍まで射程に置き、予防的なアプローチで、新たな医療サービスを提供するという同クリニックの取り組み。言葉だけは一般的になりつつある。オーダーメイド医療を具体的に形にしたものとしても評価できよう。

「がんの超早期リスク評価は、何より我々のがんを予防するチャンスを与えてくれます」という武井氏。同じようにがん関連の遺伝子変異を持つている方でも、生活習慣に気を配って、発症しない方もいれば、偏食や過度の喫煙など生活習慣を顧みず、遺伝子を傷つけ、がんに至る方もいる。がんは遺伝子に関わる病ですが、先天的なものよりも、後天的、つまりは生活習慣の乱れや生活環境によってそのリスクが左右される度合いの高い病です。オーダーメイド医療という新たな医療のあり方も、わが国は黎明期ですが、できることから始めていかなければ、実績が蓄えられていきません。現状では、全ての方にあって、がんという病は、予防できるものではないです。が、予防できる可能性の高い方と、そうでない方、それぞれのニーズにあった医療サービスを提供し、医療のあり方に新風を吹き込める可能性がある」(武井氏)

同クリニックの遺伝子検診は、がんを患っていない健康体の人々だけでなく、がんの再発を懸念する、がん治療経験者の再発防止管理にも提供される。

がん治療後、改善しつつあるのか、再発に向かって進行しているのか、というがん治療経験者にとって最も関心のある点を「治療後の体力や免疫力の差、生活習慣など、健康体の方と比べて、体質や症状などについてよりデリケートに向き合っていく必要性の高い一人ひとりの方それぞれに見合ったアドバイスができる」という点では(遺伝子検査を基にした)オーダーメイド医療の有用性が発揮されていく領域で、今後さらに定着していく可能性が高いと見えています」(武井氏)

医療機関における遺伝子検査やそのデータを基にした医療的な指導は、すでに国内の医療機関でも実施されている。

一般的な認知度はまだまだ高いとはいえないが、例えば、乳がんや子宮がんなど、女性向けに、体質判断



治療から予防に軸を移した医療「サービス」の普及が望まれる(写真はイメージ)

を目的に、先天的リスクの評価を対象に行われているケースは少なくない。

一方、同クリニックの遺伝子検診は、体質判断ではなく、疾病リスクの有無と、一歩も二歩も踏み込んだ検査。繰り返しになるが、生活習慣などによる後天的要因によるがんリスクの有無、そして、後天的要因によるものであれば、生活習慣の見直しなどによって、リスクを軽減できる、超早期段階での検査という点が、一般的な遺伝子検査と一線を画している。

さらに同クリニックでは、これも前述したが、がん治療経験者向けに再発防止や治療効果確認という、利用者のニーズに対する「解」をしっかりと示す試みを行っている点でも、類似サービスと異なっている。「全ての遺伝子検査がそうだが、ということではありませんが、遺伝子検査によってがんリスクの有無をデータで示して、実質的にそれでおしまいというサービスもあるかもしれない。当クリニックでは、仮にがんリスクが存在した場合、利用者の方には、生活習慣などの丁寧なカウンセリングを行うだけでなく、結果次第ですが、医療施設の紹介など、可能な限り利用者の方に寄り添った医療サービスをご提供しており、不安や疑問などにも丁寧にお答えしており、安心して利用者の皆さんには利用して頂いております」(武井氏)

今後の同クリニックの展開と医療の今後について、武井氏に尋ねると次のような心強いコメントが返ってきた。

「現状では、この遺伝子検診という試みは、医療現場全体からすれば小さな取り組みの一つかもしれない。それでも、医療の最前線に身を置く医師の一人として当クリニックの遺伝子検診には相当のポテンシャルが秘められていると考えられます。それは、利用していたいただいた皆さんの納得感が違うと思うからです。病気を克服していく上で、医師と患者の距離感が大切なことは、将来も普遍でしょう。遺伝子解析という技(わざ)と、医師の術(すべ)で、今後より多くの皆さんに遺伝子検診を利用していただければ、企業に定期的に健康診断のメニューに加えていただく活動も進めております。企業レベルで利用していただければ、さらにこの検診サービスのメリットを認識して頂けると思います」(武井氏)

がんは治療する病から、予防する病へという時代が、到来するのかもしれない。未来の話ではないのかもしれない。

(本誌・井内一喜)